

龍南會雜談第叁拾七號

征清軍凱捷祝賀式の奉賀文

臣元等本日、茲に征清軍凱捷式を舉行し、職員生徒等しく

大元帥陛下御眞影の御前に集つどひ侍りて、謹て上は

大元帥陛下の盛徳大業を祝ひ奉り、下は大日本帝國の武運興隆を賀し申さんとす。

臣元等伏して惟ただこるに、我が邦、客歲朝鮮の小弱を扶け、東洋の平和を保たんが爲め、
圖らず、清國と戰端を開き、爾來、今に至るまで、既に十餘箇月の長きにわたり、畏多おそく

も、

大元帥陛下には、千代田の大宮おほみやを出させられ、天さかる廣島の行宮かりみやに、大駕を駐めさ

せられ、六軍の將卒と起臥おきふを共にして、夜はよもすがら、晝はひもすがら、大御心を

軍國の大事に勞いたづかせ給へりしは、我が邦臣民の常に推察し奉りて、寢も安からざる

ばかりにぞ思ひ奉れる所なりし。然るに、義軍の到る所、勢風雨の如く、四百餘州の草

木風かぜを望みて靡たふき伏せざるなく、遂に媾和談判の機をぞ促しける。清國、是に於て、一

國の重臣つゝを派し、巨大の土地を割きき、億萬の償金を出し、茲に始めて馬關の條約成り、

平和の復舊を見るに至り、今や平らけく、安らけく、大旆おほかばたを舊都にまで還かへさせられ、絶海の大軍も、漸を追ひて凱旋せしめ給ふこと、近きに在らんとす。嗚呼、陛下、一朝、仁義の師を興し給ひ、内には祖宗の遺業を光あはにし、外には皇國の稜威を宣のべ給へる、その千古未曾有の盛徳大業、誰かは萬壽を捧けて、以て之を祝ひ奉らざらんや。殊に今回の大詔を拜讀し奉れば、露およみ及獨佛三國の忠言をも容いさせられ、遼東の讓地を清國に還へし、以て東洋百年の治平を圖り給はんとす。大御心にあらせらる、誠に言いはまくも畏かしこかれども、亦是れ内外例たまたもなき千古の義舉とや申すへき。其の大御心の偉おほなる、大御惠の弘ひろき、天覆地容あまのつちのくわも、未だ喩とするに足らず。我が邦の臣民たる者といへども、神慮の深きに感じ奉らざるはなし。況や清國の君臣たる者、いかでか聖意の厚きに服せざらんや。夫れ陛下既に此の大恩を、彼の敗殘の餘に加へ給へる、乃ち之を従へつへく、之を臣としつへく、將來永く清國を啓導し、以て東洋の覇主たらんのの機か、自茲おにあり。且又、其の容るへからざるをも容れさせられ、以て與ふべからざるをも與へさせらる。是れ即やて他日其の制すべからざるを制し、馭すべからざるを馭することを得、以て東亞の大局を保持せんのの機かも、自茲おに存す。嗚呼、義舉を以て始まり、義舉を以て終り、斯に鄰交平和の基礎を固くし、國運進張の根柢を立て、茫々たる太平洋、この一大強國の在ることを、世界大陸の空に掲げ、以て萬國の耳目

を一新したる我が帝國の武運興隆、誰かは萬歳を唱へて以て之を賀せさらんや。
茲に臣元等感激の餘、謹て鄙言を草し、微意の存する所を併せ述べ奉りて、以て征清
軍凱捷祝賀の式を竟へ奉る。

明治廿八年五月十七日

第五高等學校長從五位勳六等 中 川 元